様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００４５６

研究課題名（和文）英国ジェームズ朝の王権表象と神話的エンブレムの変容研究

研究課題名（英文）Transfiguration of Jacobean Kingship and Mythological Emblems

研究代表者
松田　美作子（Matsuda, Misako）

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：１０４０７６１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　ジェームズ朝イングランドにおける王権表象に、神話的な英雄や超自然的生物が利用されていることを、同時代のエンブレム表象を援用して解明することを目指した。そこで、もっともジェームズ一世、ヘンリー皇太子に近しいヘンリー・ピーチャムが作成したエンブレム手稿とMinerva Britanna(1612)を中心に資料収集と実地調査を行った。その成果の一部は2021年『初期近代英国のエンブレムブック』（金星堂）にまとめた。ピーチャムのエンブレムが忠実に再現されたブリックリング・ホールのロングギャラリーを実地に調査し、王の地位を不死鳥やマーキュリーといった神話的象徴を用いて支えていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究対象としたエンブレムブックは、ルネサンス期のヨーロッパの文芸作品に、多大な影響を与えたバイメディアルなジャンルである。エンブレムを構成する図像を、添えられたモットーと、図像と直接関係のない謎解きのような詩文から解釈するという視覚を通じて象徴的に意味を読み取るという方法は、広く普及していた。こうした思考を理解することは、王権をどのように表現したかを解明する基盤となるであろう。その点を『初期近代英国のエンブレムブック』において世に問うた。今後、このジャンルがさらに周知され、近代初期の文芸のみならず他の領域の研究に活用されることを期待する。

研究成果の概要（英文）：　This study aimed at clarifying how the kingship of James I were shown with mythological emblems. James was fairly troubled by religious and political instability, and he firmly believed the divine right of kings. To show him as a glorious and dignified king, playwrights such as Shakespeare and emblematists used mythological heros and supernatural creatures. Especially, Henry Peacham handed his emblem manuscript to James and Henry, and his emblems were worth examining. He also published the emblem book, Minerva Britanna (1612). Some of his emblems were used to decorate the ceiling of the long gallery of the Brickling Hall, which builded during the 17th century. We can see emblems are popular among James's courtiers, and how emblematic decoration functions as a support of James's strong kingship.

研究分野：初期近代英国の文学、視覚文化

キーワード：エンブレム　視覚文化　物質文化　シェイクスピア　ジェームズ一世　ヘンリー・ピーチャム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

17 世紀前半のイングランドにおけるエンブレム表象研究は、フランシス・クォールズの『エンブレム集』（ロンドン、1634 年）を中心に展開されてきた。この 17 世紀から 20 世紀初頭に至るまで非常に人気を博したエンブレム集は、「大陸」のカトリック派の宗教的エンブレムをもとに、プロテスタント派の瞑想に応用されたものであった。そこには古代の英雄や神話神になぞらえられて表象されたジェームズ一世やチャールズ一世との関連はみられず、宗教的な観点からではないもっと広い文化的で政治的なエンブレム研究はほとんどみられなかった。しかし、ジェームズ朝において著作者ヘンリー・ピーチャムは、エンブレム手稿本を 2 回、ジェームズ一世に献呈、ヘンリー皇太子にも一回献呈し、それらをもとにしたエンブレム集、Minerva Britanna（ロンドン、1612）を出版した。彼のエンブレムには、王権神授説をはじめ、ジェームズ一世に関わる表象がいくつか含まれている。そこで、当研究は、テーマをジェームズ一世の王権表象にしぼり、神話的エンブレムや超自然的な生物を扱ったエンブレムを中心にすえ、視覚文化からその表象を追求する足がかりとした。宗教上の教義、聖句の解釈や平信徒の信仰を問題とした宗教的エンブレムとは異なるエンブレム文学の意義を追求するのである。そのさい、同時代のシェイクスピア劇などの文学作品における視覚的イメージの援用についても考慮し、ジェームズ一世の王権表象を visual, verbal 両面から捉え、バイメディアルなジャンルであるエンブレムにふさわしい多面的アプローチをとれるように、文学にも考察を広げることを考えた。

２．研究の目的

16 から 18 世紀のヨーロッパにおいて隆盛をみたエンブレムは、作家や画家にイメージの事典として利用されたり、一般的には道徳や真実を説く寓意図として受け入れられていた。当研究では、エンブレムがそうした通念的な理解に収まらない、もっと広範囲に及ぶ影響を与えていたことを、ジェームズ一世治世のイングランドを対象に明らかにすることを目指した研究であった。ジェームズ一世やヘンリー皇太子の宮廷文化は、ベン・ジョンソンとイニゴー・ジョーンズによる宮廷仮面劇が示すように、視覚文化的な要素が強かった。そうした仮面劇では、チェーザレ・リーパの『イコノロジーア』が、衣装の色や表現に参照されていたことが多くの研究で明らかにされてきた。しかし、リーパの擬人像からの借用ばかりでない、ピーチャムのエンブレムなどを具体的に分析することによって、ジェームズ朝における王権表象を、同時代の文化、政治的や宗教的背景をふまえて解明し、それらのエンブレムがジェームズ一世のイメージ戦略にどのように寄与していたかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

近代のエンブレムブックは、主なものはデジタル化されている。そこでまず、ヘンリー・ピーチャムのエンブレム集や、彼のように多作であったジョージ・ウィザーのエンブレム集、『古今エンブレム集』（ロンドン、1639）などを収集し、神話的エンブレム、政治的エンブレムといった項目をたてて整理した。次にヘンリー・ピーチャムの 3 種のエンブレム手稿本を所蔵している大英図書館とオクスフォード大学ボドレー図書館にて写本の調査を行った。とくにヘンリー高知足に献呈したものは、美しく彩色されており、リーパの擬人像に設定された色彩との比較をしたり、色彩のシンボリズムを考察することが可能であった。さらに、ピーチャムのエンブレムを忠実に写したノリッジ郊外の brickling Hall のギャラリーの天井装飾におけるエンブレム連作を調査した。ピーチャムのエンブレムが、ジェームズ一世に近しい廷臣の邸宅に利用されていたことは、当時エンブレムがングランドの物質文化に浸透していたことの証であった。どのエンブレムが装飾に採用されたのかを分析することで、その政治的意図を分析することにした。ここからもジェームズ一世の宮廷におけるエンブレム文化の受容の一側面を探ることになった。

４．研究成果

当初、この研究は 2019 年から 2021 年の 3 年計画で行うものであった。しかし、2020 年からの新型コロナウィルスのパンデミックにより、大英祖書館やボドレー図書館は閉鎖され、全面的に再開されるまで、研究の延長を余儀なくされた。2019 年と 2020 年 1 月初旬、大英図書館とボドレー図書館での調査を行ったが、その後、2024 年 2 月まで実地調査は行えなかった。ブリックリング・ホールへの入場も、ようやく 2024 年２月にかない、修復され、当時のままに保存されたギャラリーの天井装飾を実地調査することができた。2019 年 12 月には早稲田大学で「シェイクスピアとエンブレムーハムレットの運命とディヴォーション」というタイトルで講演を行

ったり、その後の新型コロナウィルス禍によるロックダウン期間は、これまでの研究をもとにして、エリザベス朝からジェームズ朝までのイングランドにおけるエンブレム受容を、物質文化や出版文化を視野に入れての著書の執筆にあてた。実地調査の大幅な遅れはあったが、大英図書館やオクスフォード大学ボドレー図書館におけるピーチャムのエンブレム手稿本の調査は、同じモットーを用いていながら図版や付与された詩文に変更がみられたエンブレムを見出すことができた。それらの変更を分析することで、ピーチャムがジェームズ一世ばかりでなくヘンリー皇太子へも配慮していたことが看取された。このような調査結果を活かして、2021 年、『初期近代英国のエンブレムブック』（金星堂）を上梓することができた。エリザベス朝からジェームズ朝に至る時代、各種のエンブレムブックを論じることで、初期近代英国において、エンブレムが同時代の文学、美術や物質文化のみならず、出版文化や政治にも影響を与えていたことが看取された。また、啓蒙活動としては、2023 年 11 月、「東」と「西」の死後世界表象―煉獄と地獄を中心に、と題して一般に開いたシンポジウムを行った。ジェームズ一世の王権神授説が、神と王の直接的な関係をうたい、王を信じさえすれば救われるといった考えが、初期近代における煉獄や地獄の表象とどのように整合性をもつのか、日本の中世、近世文学研究者も交えて議論した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松田美作子
２．発表標題 『コリオレーナス』の受容-シェイクスピア劇5幕3場を巡って
３．学会等名 エンブレム研究会第29回研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 松田美作子
２．発表標題 シェイクスピアと同時代（前後）の宗教と視覚文化：マグダラのマリア受容と娼婦表象
３．学会等名 第５８回シェイクスピア学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松田美作子
２．発表標題 シェイクスピアとエンブレム－ハムレットの運命とディヴォーション
３．学会等名 早稲田大学英文学会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 松田美作子	４．発行年 2021年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 216
３．書名 初期近代英国のエンブレムブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関